



Title	裸体をもつてほこる 詩人：武者小路実篤こおける 詩 の成立
Author(s)	亀井, 志乃
Citation	国語論集, 11: 19-54
Issue Date	2014-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7477">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7477</a>
Rights	

# 〈裸体をもつてほめる〉詩人

## ——武者小路実篤における〈詩〉の成立——

亀井志乃

### 序

僕がどんな人間で、どんな生き方をしてきたかと或者に聞かれた時、僕は自分の詩集をその者に渡して「僕はこの通りの人間です」と答えるであろう。僕は今迄に随分いろいろのものを書き、自分の事も書いて来たが、詩集の中に一番自分の本音をかいて来たと思う。

武者小路実篤(明治十八・一八八五〜昭和五十一・一九七六)小説家・詩人・劇作家・画家は、満七十一歳に至り、『我が人生 詩を通して見た我が内面生活』(新潮社 昭和三十一年)の出だしに於いて、右のように回想している。彼の詩は、平易で、飾らず、脳裡に浮かんだ言葉をそのまま取り出して人前に放り出したかのような詩である。彼が出る直前までの、日本における伝統的な(詩歌)の面影はまるでない。一見無造作だが、決して単なる散文ではなく、(詩)として印象に残るものとなっている。

はき出せどもく

はき切れずく

かく泉嘆げく

はき切れぬ内は

(「泉の嘆き」『白樺』第二巻第七号 明治四十四年七月)

百里歩かねばならぬ人と、

千里歩かねばならぬ人とは

自づからその歩き方がちがはねばならぬ、

その意気組がちがはねばならぬ。

(「百里歩く人と、千里歩く人」同前)

明治十五(一八八二年)に『新体詩抄』が世に出て以来、古色蒼然とした伝統詩歌の規範からの脱却は、意欲的な青年詩人達によつて絶えず試みられていた。また、散文表現の(言文一致運動)に影響を受け、詩のボキヤブラリーも、古典的な雅語から、

徐々に、比較的日常生活に近い語彙も含む方向に変化してきていた。

それでも「詩語は詩語であり、また、詩にはあくまで詩の形式（文字数または音の数の整序、頭韻・脚韻、等々）がある」ということは、当時の詩人達にとつては、おそらく、改めて念頭に浮かぶことさえない大前提であつたと思われる。そしてその意識は、それほど西洋の詩に影響を受けようとも、大きく変化することとはなかつた。なぜなら、西洋の詩にも、(ライム) (Rhyme) という独特の押韻規則や、ソネット形式等のジャンルに応じた構成の約束事があり、翻訳者や外国語学習者達は、ある意味「だからこそ詩歌だ」として、異国の言語表現を受け入れていたからである。

ところが、明治四十年代、武者小路実篤という無名の青年が、これらの規範意識をあつさり越えたかのような、無手勝流の口語詩を発表するようになった。そしてその後、彼の詩は、千家元麿、山村暮鳥や室生犀星等々、数多の大正期又はそれ以降の詩人に影響を与えることとなつた。おそらく、昭和期のダダ派やプロレタリア派に至るまで、その影響を全く受けなかつたと言ひ切れる詩人は殆どいないであろう。

だが、そうした後世の位置づけとは裏腹に、詩を書き始めた当初、武者小路には、自分が（詩人）であるという自意識は希薄であつた。「新しい詩人として世に出てやろう」という積極的

な野心は、少なくとも、彼の書くものからは感じられない。事実、武者小路が初めて、代表作「誕生日に際しての妄想」を含む詩二十編をまとめて発表した「日記の内より」(『白樺』第二巻第六号 明治四十四年六月)の冒頭で、彼は、一種の対話形式の緒言を記している。

「論文か」

「あらず」

「小説か」

「あらず」

「詩か」

「あらず」

「何ものか」

「知らず」

言うなれば、それらの作品群は、彼自身にも名づけることのできない、ノンジャンルの表現だつたのである。

では、文壇・詩壇に見做うべき前例もなかつたという環境で、なぜ彼は、それまでの詩のアンチテーゼを具現化するかのような、新しい詩の形を世に示し得たのか。そもそも、その言葉は、なぜ読者である我々にとつても（詩）なのか。

それらの疑問にアプローチするために、本論では、武者小路が

詩を書き始める前段階における背景がいかなるものであったかについて、青少年期に焦点をあてながら考察してゆきたいと思う。それと同時に、同時代の世間における一般的な文学潮流の変遷を視野にいれながら、一人の若者を取りまいていた状況を明らかにしてゆきたい。

## 一、<sup>た</sup>詠わぬ少年

明治二十一年（一八八八年）にドイツから帰国した軍医・森鷗外は、翌年、訳詩集『於母影』を『国民之友』誌上に発表。また続けて、小説『舞姫』『うたかたの記』を『しからみ草紙』誌上にあらわし、日本における美文系の詩と散文の、（近代）的な新しい形を提示した。その森鷗外と、日清戦争時の遼東半島において親交を深めた雑誌『日本』の従軍記者・正岡子規は、病に倒れて日本に帰国した後、俳誌『ホトトギス』を創刊（明治三十年）。後に『根岸短歌会』も主催し（明治三十二年発足）、俳句と短歌、両ジャンルの革新を推進した。（根岸短歌会を通じて鷗外との親交はその後も続き、また『ホトトギス』誌の方は、八〇九年の後、友人・夏目漱石の初期作品『吾輩は猫である』『坊っちゃん』の発表舞台となる。

また、明治三十年には、まだ二十五歳の青年教師であった島崎藤村が、仙台赴任時代に書きためていた新体詩をまとめ、処女詩集『若菜集』として刊行。そして三十四年には、与謝野晶子

が歌集『みだれ髪』を発表し、その艶麗かつ奔放な歌風で、文学好きの若い世代の心を魅了していた。

——その頃、そうした文学的状况を最も身近に感じられる場所である首都・東京において少年期を過ごしていた武者小路実篤だが、その実、彼はそうした動向とは全く没交渉であった。

作文は大の苦手であった。論文ならばまだしも、紀行文や随筆的な方面では、何も書きたいことがなかった。「彼（※武者小路自身）は空々しいことをかくことは嫌ひだつた。かいてもかゝないでもいゝやうなものをかくのは嫌ひだつた」（武者小路実篤『或る男』<sup>※</sup>五十二章）。

三歳上の兄・武者小路公共きんぎょに、作文や語学が嫌いな事を心配された時には、彼は冗談めかして、「外国人に日本語を覚えさせればいい、文章は書記さえ雇えば自分が書かなくても構わない」と言つてのけた（同前）。満十五歳頃（以下、本稿における年齢表記は基本的に満年齢）までの彼の夢は、世を治める人物になることであつた。それも、単なる大臣などではなく、アジアの状況、ひいては世界の版図をも大きく変えることの出来る傑物である。楠木正成や豊臣秀吉、ナポレオンやアレキサンダー大王などに、少年らしい英雄崇拜の感情を以て憧れていた。

だがその一方、学校ではおとなしく、学習院初等科（現代の小学校にあたる。六歳以上、六年間）時代にたった一度だけ同校の生

徒と喧嘩した時には、教師に「貴君あなたのような方はたまには喧嘩をするといふのです」（武者小路実篤「小さな世界」大正三年執筆）大正五年刊行）と賞められたほどであった。また体が弱く、運動音痴でもあり、自分の理想と現実との埋めようもないギャップは、本人が一番よく承知していた。乱暴者には腕力ではまったく敵わず、また、實際露骨にのけもの扱いされており、つき合うのは自分と同様「ごくおとなしいか、呑気で気楽な相手ばかりであった。そして、親友と呼べるほどの友はいなかった。

ただ一つ、人目をひく点があったとすれば、この内気な少年が、初等科の頃から口演（演説）の時間だけは大好きで、級の中で一番大きな声でしゃべったこと（『或る男』四十七）と、議論を戦わせる事に関しては同級の誰にも負けなかったこと（同前 四十二）であろう。現代的に言えば、プレゼンテーションとディベートだけは大得意だったということになる。また、学校で行軍演習（後述）に行き、皆で軍歌を歌う時には、彼は一人「調子はづれに大きな声を出し」（同前 四十七）していたという。

そんな実篤に、自分の中にあつた気弱さの壁を乗り越える契機が訪れた。

それは、明治三十六年秋、彼が高等科（十八歳以上、三年間）の一年級の時に学習院の輔仁会（同学の校友会）大会で行つた「粗暴と活発」という題の演説であつた。当時の速記記録など、彼の才

ラル（口頭）表現に即した記録は残っていないが、その際の内容を書いたものと思われる「所感録」という彼の論文が、同年十一月の校友会誌『輔仁会雑誌』第六十一号に掲載されている。次の文章は、その抜粋である。

何人と云へ我が学校の腐敗は認め得べし然るに中には我が学校は腐敗せずと云ふ者あり斯の如き者は至愚者のみならずれば阿諛者のみ余輩は斯かる人間の本院に多きを驚き且つ嘆ずる者也

余輩我が学校の悪弊を茲に列挙せんか我が投書は恐らくは没書せられんされば今は書かずされど人あり我が言を否認して斯の如き事なしと思ふ者は請ふ来れ余輩大に語らんと欲す

然らば如何にせば此の如き腐敗を救ひ得べきか、興風会は眠つて又永遠に起き能はじ、鉄拳制裁は今のありさまにては己が頭を打つに如ず、当局者は之れに施す術を知らず嗚呼恐るべしく、本院は挙げて腐らんとす、此の時に當つて一大決心を断行せずんば白布の如き少年ために赤布に変せんとす（後略）

（概略：誰の目にも、我が校の腐敗は明らかであろう。中には、腐敗などしていないという者もいるが、それは愚か者か、誰かに媚び

へらう者だけだ。自分は、こうした人間が本院に多い事に驚き、残念に思う。

この学校の悪弊を列挙して書いたとしても、おそらく、その投稿は役にされるであろう。だが、今自分がこう言っている言葉を否定したい者は、いつでも自分のもとに来るがいい。自分は、それに就いて大いに語りたいたいと思っている。

さて、どうしたらこのような腐敗を救うことができるか。風紀を正す会は一応あるものの、全く機能していない。しかし、だからといって腕力に訴えるのは、自分で自分の頭を殴るようなものだ。学校当局も、この状況にはなすべを知らない。ああ、このままでは本院はまったく腐りきってしまう。今、一大決心をしなければ、白布のように純真な学生達も悪弊に染められてしまうだろう。(う。)

一口で言えば、堅苦しく、読みづらい文章である。しかし、彼の自伝的回想「小さき世界」では、この講演の直後、下級生に「若し演説の草稿がおありになるならば貸して頂きたい」と言われてそれを渡した、となっているので、口語と文語の違いはあっても、内容は、ほぼこの文章の通りであつたろう。学習院の(腐敗)と(悪弊)を、彼は最大限の勇気を奮い、大勢の前で厳しく糾弾していたのである。

元々、維新前の公家・大名・士族から成る家柄華族と、維

新後に新政府への貢献を認められて新たに受爵した——つまり家柄華族から見れば「成り上がり」の——勲功華族、その両方の子弟を集めて創られた(学習院)という華族学校の中では、どれほど建前上否定していようと、つい一世代前までの家格の上下関係は厳然として存在しており、そこで複雑な(義理)や(主従関係)に絡め取られずに生きることは至難の業であつた。<sup>\*2</sup>そのため、自分の家の勢力や家系の優位性をかさに着て、その上腕力までふるい、立場や力の弱い学友たちを支配しようとする学生たちが大きなグループを形成してしまつた場合には、教師にも手のつけようがなかった。なぜなら、教師たちの大半も、そうした問題児たちよりは元々の身分が低かつたためである。例えば、先の引用個所で、教師が、喧嘩した実篤少年に語りかけた時の言葉遣い(貴君のやうな云々)を見れば、学習院における教師と生徒の立ち位置の、普通の学校との差は一目瞭然であるろう。

実篤のいた時期には、彼より一年下の学年が典型的にそうした悪童タイプで、学校中で持て余されてお<sup>\*3</sup>り、だからこそ彼は、講演後に下級生に後で殴られる事を覚悟の上で、輔仁大会に集まつた学生と教師の前で「それは学校自体の腐敗だ」と言い切つてみせたのである。

さて、一方、彼の文体についてであるが、このような漢文読み

下似的な文章自体は、この時代、特別珍しいスタイルではない。むしろ、新聞や、社会批評を目的としている雑誌においては、この文体こそが主流であった。硬派の歌人を以て任ずる与謝野鉄幹（晶子の夫）も、論文はもっぱらこうした調子であり、『旧態依然の形式を守るばかりの内容柔弱な和歌は国を滅ぼす』と主張した「亡国の音」（明治二十七年）などは、その代表例にあたる。幸徳秋水の「長広舌」（明治三十五年）、内村鑑三の「何故に大文学は出ざる乎」（明治二十八年）等も、言葉遣いの点では大差はない。

武者小路は、明治三十四年、中等科（現代の中学・高校にあたる。十三歳以上、六年間）にいた十六歳頃から次第に（筆の力）の重要性に目覚め、自分の好きな文章を抜き書きするようになった。当時最も先鋭的な社会・政府批判を展開することで知られた新聞『万朝報』を購読し、そこから、内村鑑三や幸徳秋水・堺桔川（利彦）の論説を写し書きしていたという（或る男「六十七」）。その読書傾向は高等科に入っても続き、日露戦争（明治三十七〜八年）前後は、高山樗牛・木下尚江・内村鑑三・網島梁川の論文を愛読し、『平民新聞』や『無我愛』も毎号読んでいた（武者小路実篤「白樺を出す迄（二）」、『白樺』第七卷第一号 大正七年一月）。少年から青年へと成長していく過程においては、彼の関心は、もっぱら社会問題やキリスト教的社会思想の方面に向けられていた。この講演からまもなくの、明治三十六年暮れ以降には、彼はき

わめて熱心で禁欲的なトルストイ信奉者となるが、それは、こうした読書の下地がすでに形成されていた結果だと言える。

一つ、端的に言うならば、高等科に進級した頃の武者小路の（自己像）は、学習院（彼にとつての（社会））に対する批評者であり、そこに生きる全ての人が幸福である事を望む社会改良者であり、さらに、そのために正義を為す者でありたいという思想家であった。彼は、学習院におけるデビュートの文章として、まさに、その自己像にふさわしい文体を選び取ったと言える。付言すれば、彼の演説は勇氣ある発言として比較的多くの学生の共感を得られたため、同級生の協力と配慮により、彼は下級生に暴力を振るわれることを免れた。また、その後、紆余曲折を経たものの、結果的には乱暴者たちに対する恐怖心を克服することが出来た。

ただし、文体だけに限って言えば、この時点では、彼の表現のどこを探しても、読みやすさや親しさといった要素はない。

これ以降、彼は一種の演説家として認識されたらしく、翌年にかけても、輔仁会大会や邦語演説部例会といった場面で毎回講演を行い、その内容を「所感録」（『輔仁会雑誌』第六十二号 明治三十七年三月）や「偶感録」（同 第六十四号 同年十二月）として掲載している。だが、文体の堅苦しさや、常に何事かを憂え訴えている思い詰めたような調子などは、変わらないままであった。

人本院の学生に懦弱者多きをそしる、之れ実に唯粗暴なりし先輩の罪のみ、されど過去は如何ともしがたし、吾人は未来に於て懦弱者の減せんことを務めざるべからず、しからは如何なる処置を取るべきか、

余の思ふ処を云はゞ無責任者を敬せずして、寧ろ賤しむにありと、夫れ世にハイカラ程愚なるはなく、無責任者程無氣力なる者はあらず、

ハイカラ自ら我れは軽薄男子なり、信用する勿れと広告し歩くに異ならざるに反し、無責任者は言に巧みに、行に巧みにして自ら善人なるを広告し歩く者なり、されど無責任者の善行は唯だ己れに責任のからざる範圍内に於てのみと知れ、実に後者は所謂偽善者！しかして前者に余の呈せんとする名は偽悪者！

（偶感録）

同誌には毎号、他にも何本かは必ず論文が掲載されてはいた。だが、ここまで切迫した慨嘆調となると、やはり珍しい部類である。そして彼は、これ以外には一篇の詩も詠まず、隨筆等を書くこともなかった。ただ（演説という場においてのみ、いわば「調子外れの大きな声」を出していたに等しい。特に、後に文芸誌『白樺』の仲間となる同級生たちと比較すると、その異質さは

かなり際だっている。

## 二、空白の父

しかし、なぜ、武者小路実篤の表現傾向には、ここまではつきりとした偏りがあつたのだろうか。その理由を考へるにあつては、やはり、その父親について言及する必要があると思われる。

実篤の父・武者小路実世（さねよ生年未詳、明治二十・一八八七）は、明治四（一八七一）年に岩倉具視を全權大使として結成された遣米・遣欧使節団の中に、（ドイツ独乙国留学被仰付）として弱冠二十歳にして選ばれた人物であつた。そして、それは、特に元公家階級の子弟としては、破格の俊才であるということを示していた。なぜ、その抜擢が破格なのか。実は、江戸時代を通じて、公家階級のための教育機関にあたるものは、宮中にも、どこにも設置されていなかった。これは、幕府に昌平黌（昌平坂学問所）があり、各藩の武士階級のために藩校が置かれていたのに比べると、大きな違いである。

その最大の理由は、江戸時代を通じて、天皇家とその臣下である公卿（公家）たちは、実質的には、徳川幕府から厳しく管理・監督されるべき対象として遇されたためである。加えて、幕府は、公卿らが独自の学問を修めるようになれば、反幕府的な気運が高まる恐れがあると警戒していた。





なる直前の実世が幼い自分を見て「この子はよく教育してくれる人があつたら、世界にひとりという人間になるだろう」と言つたという話を聞いたと述べており、その事について初めて聞いたのは、自分が十四、五歳の頃であつた(武者小路実篤『思い出の人々』昭和四十一年 講談社)としている。

だが、それは単に、その時初めて父の(予言)を聞いたから、自分に自覚を持つた、などという事ではなかつたはずである。むしろ子供の頃からずっと、自分の中の空白部分である(父)、しかし悲劇的な夭折をとげたという(父)の人生を、叶うことなら生き直してやりたいという潜在的な願望があつたからこそ、その話に一層深い感動をおぼえたのであろう。そしてこの話が一生忘れられぬ(予言)として記憶されたほどにも、(父)の非在は、彼にはただの空白ではなく、心の奥底に封印された悲しみであつた。

死んだ人の夢を見ると云ふことは印象の強いものである。

神秘な力がある。(中略)死んだ父の夢では、ずっとあとで見ただのだが、彼がある処へゆくと、人里はなれた処に一軒の家があつて、其処に彼が入つてゆくと、広間に一人の男が、腰かけて彼のくるのをまつてゐた。彼はその男を見るとすぐ「お父さん」と思はず云つて、その男の前に跪いて泣いた。

(『或る男』五十一)

ただ、それは、あくまで彼の内心のことである。学習院の仲間にとつてはまだ、この、(武者小路)という男は、おとなしきながらも、結構気楽そうにも見えながら、ある時には突然大胆な正義漢となり、思い詰めた面も見せるという、一種の変わり者に過ぎなかつた。

それではその時期、実篤の同級生たちは、同じ時間を共有しながら、どのような文学に興味を持ち、また彼ら自身の言語表現を行つていたのであろうか。その点について、再び『輔仁会雑誌』を参照しながら考察してゆきたい。

### 三、(雅号)を持つ少年たち

『輔仁会雑誌』は校友会誌であり、文学同好の士が作る同人雑誌とは性質が異なつてゐた。当初は、おそらく学校の課題等で書かれた作文をベースに構成されていたのであろう。掲載されていたのは主に(論説)や(講義)、(雑録)であり、その他、(史談)や(文園)などの歴史物語や創作的なものを載せるスペースもあつた。誌面は、ほぼ中等科と高等科の文章で埋められているが、末尾には(幼年部)というパートも付されている。なお、初期の頃はどの文も本名で掲載されていたが、これはあくまで学校の出す校友会誌だったので、本名明記は当然と言えよう。

ところが、ちょうど実篤が高等科に上がる明治三十六年頃か

ら、誌面の雰囲気は、かなり急速に変わつて来る。

変化の端緒は、まず、第六十一号(明治三十六年十一月)の(詞苑)欄の新設としてあらわれた。これにより、以前はサブ的な位置にあつた紀行文や随想、新体詩、和歌などの掲載が、一気に増えてきたのである。

実は、この年の九月から、実篤の同級生だつた木下利玄・細川護立が、同雑誌の編纂部(編集部)に加わつた(当時の学習院の新学期は九月開始)。この二人は元から文学好きであり、すでに第五十九号(明治三十五年十二月)には前田利為と二人で書いた「木曾の山越」という紀行文を寄せているが、彼等が高等科に上がり編集に入ったことで、かなり、自分たちの好みを反映させることが可能となつたらしい。また、第六十一号の輔仁会各級代表委員のリストには「高一、志賀直哉」の名も見える。

とはいえ、六十一号から六十二号までの間は、投稿者の名前は依然として本名であつた。それが、六十三号(明治三十七年六月)からは、(詞苑)欄の筆者の名前が一変する。本名の者はわずかにいるものの、ほとんどが(碧月)(汀舟)(酔月)(花筈)などの雅号で随想や和歌を発表するようになったのである。多分同級生なら、誰が誰だかある程度わかつたのであろうが、雑誌のどこにも、雅号と本名とを対照出来る一覧などは見られない。

ところで、雅号という一種のペンネームは、近世以前において

は、文人や書家・画家などが普通に用いるものであつた。さらに言えば、雅号を用いる事そのものに、*自分には風雅な教養がある*と世に宣言する意味合いが含まれていた。

その点をふまえて改めて見てみると、明治期の大半を通じて、文学者のほぼ全員が、何らかの雅号を用いている。森鷗外、夏目漱石は言うまでもない。北村透谷・島崎藤村・馬場孤蝶・与謝野鉄幹・石川啄木・大町桂月・武島羽衣・正岡子規・高浜虚子……詩と短歌方面のみに目をむけても、この通り、本名ではなく雅号で知られている人々ばかりである。

また、雅号は一人に一つと限らない。年齢が進むにつれて何度か変えた者もいれば、同時期に幾つもの名前を、文章のジャンルや絵・書によつて使い分けていた者もいる。また人によつては、気まぐれとしか言いようのないランダムさで、様々に名の変えていた場合もあつた。先に挙げた明治の文学者たちも、大概は、複数ある中の最も有名な雅号によつて知られている。

現代のような著作権法がなく、従つて、この人にはこの雅号だと確実に結びつけておかなくてはならないという管理意識も希薄だつたため、今から見れば、その活用は驚く程自由自在であつた。いわば彼らは、皆、(雅号)というマスクを楽しみながら掛け替えて、文化人であり教養人である自分をそのつど演出していたのである。

そして、明治三十七年の学習院においても、文学好きの学生

たちは、そうした(雅号)の用い方をそっくり真似していたのである。いや、「やつてみたくてしようがなかった」事を、ついにこの時、実現することができたのだと言えよう。

この、学習院生の(雅号)には、一つ裏話がある。

先に(一)の項でも触れたが、学習院には、当時、春と秋に一回ずつ(行軍演習)という模擬軍隊体験行事があった。

もともと、日本の貴族たる(華族)には、「皇室の藩屏(防備するもの)であるという建前があつたが、とりわけ、日清戦争を経て、さらにまた対ロシア関係の緊張が高まってからは、一段とその役割が期待されることとなつた。学習院が、学生に、まだ少年のうちから軍隊での寝起きや、銃を持つての実戦さながらの模擬訓練を経験させていたのも、将来的に、ある程度の人数は必ず将校として軍の中枢部に入るであろうことを見越していたからであろう。中等科と高等科の学生たちは、白帽軍と黒帽軍に分かれて中隊・小隊編成で戦い、また状況の変化があれば、そのつど自主的に作戦を立てる事も行つていた。夜中の戦闘・行軍なども体験した。

とはいえ、何と言つても、十代から二十代初めまでの男子の集団である。友だちと一緒に、普段はあまり行かない所(例えば埼玉県・千葉県などの村落部)に行くのであるから、研修旅行的な浮き浮き感が全くないと言えは、それは嘘になる。おまけに、日頃

は(若様)として家で大事に扱われている少年たちが、二泊三日、兵隊として集団行動に放り込まれるわけなので、そこは、真剣にやつていてさえ、普段は絶対起こしえないような失敗を、あちこちで繰り広げる羽目になる。

その有様を『輔仁会雑誌』の「行軍記事」末尾、「銃煙」という小コーナーで面白く紹介していたのが、武者小路の同級生、木下利玄・細川護立・正親町公和おのおまきんかと志賀直哉の面々だったのである。

彼らは、行軍での面白エピソードについて書きたい放題の事を書くために、それぞれ匿名性の高い(雅号)を用いた。彼らが共同で書いた記事が初めて掲載されたのは第六十一号であり、それはちょうど、武者小路実篤の最初の「所感録」が載つたのと同じ号であつた。おそらく「銃煙」欄のメンバーは、その時の書く楽しさが忘れられず、翌年に入つてからは、高学年の編集担当者としての権限で、教師にも話を通し、(雅号)を使える範囲を拡大したのである。

それでは、この少年文人たちの詩歌・文章表現の水準がどのようなものであつたか、実際に見てゆくこととしよう。

#### a 正親町公和

正親町公和(明治十四・一八八一〜昭和三十五・一九六〇)の出自は公卿華族。彼の家は、宮中でかつて大納言の位にまで登つた家柄であつた。

ただ、彼は、中等科五年級頃に武者小路の学年に編入して来るまでは、東京府立尋常中学校に通っていた。なぜ初めから華族の学校に入らなかったのか、また、なぜこの時になって改めて編入したのかについては、不明である。さらに、編入時には、彼は同級生より四歳も年上(二十歳)であった。これには、外部からの編入は初等科と中等科に限る”という当時の学習院規則が関係していると思われるが、それにしても少々年齢が上すぎる。あるいは、それ以前の、病気による長期欠席などが関係していたのであろうか。

ただし、この頃の学習院は、勉強で学生を厳しく締めつけることこそなかったものの、成績不良者や長欠者は遠慮なく落第させていたため、次の項で触れる志賀直哉のように、一つ二つ上から落第してきた者が、クラスに数名いるのは当たり前であった。それを考えれば、正親町の存在も、極端に異質というほどではなかったかもしれない。

それに正親町は、絵画や文学に精通した、芸術家肌の青年であった。その点が、当時「お貞さん」(志茂しもテイ)への片思いに焦がれて、情緒面での感性がようやく目覚めつつあった実篤の心をひきつけた。「正親町は彼が五年の時に、入学した。組がちがふので同級だったが、殆んど話はしなかった。たゞ画のうまい、文学に興味のある人だと云ふことを聞いて懐かしい気がしてゐた。文学に興味があると云ふことは、彼には何となく貴いことこのやうに

思はれてゐた」(『或る男』七十四)。

また事実、正親町が『輔仁会雑誌』に投稿した文章は、単によく出来た作文などというレベルを超えていた。次の文は、第六十一号に掲載された「旅の落葉」という短文集からの抜粋である。

#### 月の涙

暁の波残を淡くひむがしの空にとどめ、海は紫の色深きに、遠きは夕霧にとざされつつ、漁の火影は恰も湿りたる紙上にオレンジ一滴を点ぜるがごとし、望月の光、清く皓として波上に銀の砂を散ずるに異ならず。

此時笛を弄する者は誰？七ツの情吹き分けて、女波男波の首に和しつつ、今、アフロヂットを夢むに似たり……………美はしき女神の俤……………香はしきリバーのそれ……………讚美の調べ……………喜びの歌！

「？」「！」、あるいは「…」など、明治に西欧文芸が紹介されてから用いられるようになった記号を、彼はすでに、自作の翻訳調の文章の中で、充分に使いこなしている。海の情景の描き方は古典的だが、そこに「アフロヂット(アフロディーテ)」という言葉が織り込まれている事で、彼が西洋古典や神話に通じていることも窺える。さらに、「紙上にオレンジ一滴を点ぜるがごとし」という

漁火いさりびの描写は、西洋絵画に詳しい者の表現だ。実際、正親町はこの時期、水彩画家の天下藤次郎つたじろうについて、本格的に西洋画を学んでいた。美の女神のイメージも、主に、絵手本などから得ていたのだろう。

しかし、こうした美文を巧みに創作する一方で、この同じ号の「銃煙」コーナーに、彼は「沙鷗さおう」という雅号で、ユーモラスな文章を数本載せている。左はその一文。

北軍の小隊が南軍の優勢な射撃に堪えられなかったのであらう夢中になつて退却するから馳け足なんかは余り経験のない記者もピツコ曳きながら遅ればせに尾して行くと記者の耳に入つたのは無邪気な子供が其母に縋りながら大声で叫んで曰くさ「オツカ―御覽よ沢山宮様が馳けて行か―」

学生たちが行軍演習をしている最中、田舎の子供が、新聞の挿絵か何かで「宮様」の姿を見知っていたのであらう、兵隊姿の彼らを見て「おつ母、たくさん宮様が馳けていくよ」と言つたという……ことなく微笑ましいエピソードではある。

こうした話を同級生と一緒に匿名で書く気楽さに、自分だけ二十歳過ぎという違和感も次第にほぐれたのであらう。この後はもつぱら「沙鷗」という名で、様々なタイプの文章を発表し続けた。なお、「沙鷗」の号は、『白樺』明治四十三年創刊の同人

時代になつても、「高尾清五郎」という筆名と共に使われ続けた。

彼は写生文にもなかなか優れていた。何げない情景を情緒豊かに活写する（写生文）は、正岡子規やその一門が提唱したものであるが、「沙鷗」は、その文体も試みている。

広き山の上は、心地よく掃き清められ、其かた隅には葎の團ひつゞましようものして、床机三つばかり列べたり、守れるは六十路にも近きかと思はるゝ、一人なれば、心置きなくよりて憩ふ。

「よくお出で下さいました、どうかまあ御ゆるりとお話なすつて……へ……泣茶で御座います

清き哉。姫の心は営利にあらず、その目的は財宝にあらず、只自然の美景に酔はんとて、此所桜の山に目を暮しつ、訪ひ来し雅び男と語らんとか。

（沙鷗「花加太美」『輔仁会雑誌』第六十三号）

かと思えば、「五月十二日風いと烈しき日」の印象を、新体詩の長詩として表現しようとしている。全編に「風吹けり、魔狂へり」の一句をリフレインさせつつ、それと交互に情景を描写してゆくあたり、よくある新体詩の模倣にとどまらない表現意欲が感じられる。

風吹けり、魔狂へり、  
ちぎれくくの雲足早う、東に西に入り乱れて、街路のあく  
た飛び立ちつ、世は濛々として弁ずべからず。

風吹けり、魔狂へり、  
貧苦に悩める矮屋の、屋根板散じて、路行く人の頬を打ち  
ぬ、処女の日傘さす能はず、麦藁帽子高く舞ひ上るかと思  
れば、急ち一転、地に落ちて、くるくくるく、跡追ふ人  
の様可笑しき。

(中略)

風吹けり、魔狂へり、  
花は嬌愁を含むでうなじを垂れ、彼の女の頬の艶々しきも、  
厭はしき、あくたの色に覆はれたり、ゆかしき香りの名残も  
とめで、其処には双蝶のむつみもあらず。

(沙鷗「狂魔」 同前)

正親町の創作の中では、古典的な落ち着きのある文体と、  
その時代先端の文学潮流とが、作品の中で不協和音となること  
なく融合している。多彩な表現を次々と書き綴ることが出来た  
正親町は、いわば、新時代の典型的な青年文人であったというこ  
とが出来よう。

## b 木下利玄

しかし、その正親町よりも、さらに多彩で幅広い表現力で、皆  
に一目おかれていた学生がいた。それが、木下利玄りげん(本名・利玄しほる)。  
明治十九・一八八六〜大正十四・一九二五)である。実篤とは初等  
科の頃から同級で、最も古い友だちの一人であった。「自分は木  
下とは七つの時から知りあひだ。木下はおとなしい、身体の上は  
ひ質だつた」(武者小路実篤 木下利玄歌集「みかんの木」跋文 大  
正十四年)

彼は四歳まで、備中吉備郡(岡山県)足守町で、旧足守藩藩主  
の弟・木下利永としながの次男として穏やかな幼少期を過ごしていたが、  
東京に住む旧藩主の伯父が跡継ぎを残さず亡くなったため、急  
遽、両親から離され、嗣子として伯父の家に入籍した。彼はそ  
の後二度と親元に戻ることはなく、特に実母とは再会も叶わず、  
利玄五歳の時に死別したという。旧家臣等の大人ばかりの家で、  
彼は、大名家を継ぐ者として厳格に育てられた。利玄が幼い頃、  
実篤にも増しておとなしい少年だったことの背景には、こうした  
「特殊な孤児」(木下利玄 随筆「道」大正十一年)のような抑圧的  
な環境も強く影響していたものと思われる。

しかしその孤独さが、利玄の場合には、夢見がちな叙情性を  
心の裡に育む方面に作用したようである。学業優秀で、特に言  
語表現の能力に優れていた彼は、やがて十三歳の時に、家臣の

息子の紹介で、和歌革新運動の旗手であった歌人・佐佐木信綱（竹柏会）に入門し、指導を受けるようになる。中等科に進んでからは学習院の塾で暮らすようになったため、同世代の友人とのフランクな共同生活の中で、彼は次第に、自由な表現者としての（自分自身）を取り戻すことができた。そして、すでに高等科に上がるまでには、短歌や随想を何本も『輔仁会雑誌』に寄せている人物として、同校の学生たちの耳目をひくほどになつていたのである。

ここでは、高等科以降の作品に絞つて紹介することとするが、彼の文体は、その種類にせよ情趣にせよ、非常に豊かな広がりを持つている。

浅い秋色は最早この平和な田舎を包んで居る、  
空には白い雲がちぎれ／＼に漂つて、地には十二三町も西にある鉄道の堤から東の方は目白が丘の方迄一面に稍黄ばんだ稲穂がうなだれて居る、

田圃や、あつちこつちの杉林や、藁家なんか、みんなあたたかな、ゆつたりとした午後の秋日を浴びて静まつて居る、  
つい半町許先に新しくたてられて居る家の鉄槌や鉦の音や、二台ひきつゞけて往つた空車の響などが寂しい田舎の小天地を破つて居る許りだ、  
蝙蝠傘をさして小さい女の子が来る、

ラケットをもつて学生風の青年が来る、  
たまに遠くに鳴く鶏の声が気をつけなければ聞える、  
鎮守の社の境内には木の葉が散つて、誰も御参りして居る人がない、

（木下利玄「雑司か谷道の秋色」『輔仁会雑誌』第六十一号）

高浜虚子の愛読者だつたという利玄らしく、これは写生文調である。ただ、引用部後半の行分けが巧まずして詩的であり、また、田舎道の明るい静寂さを、通行人等の動きを点描することによつて逆に効果的にひきたたせている。

右の文は本名で発表しているが、同号の「銃煙」欄では、（雁来紅（秋に葉が紅色に染まる草花。葉鶏頭））という雅号で行軍演習にまつわるエピソードを愉快に描いてもいる。また、明治三十七年以降になると、新たに「はるさむ」という号が気に入つたらしく（利玄の「はる」春に「早春で寒い」の意味をかけたもの）、その名で様々な文体を披露している。

もうかれこれ十二時も三十分ばかり過ぎたと思ふ時分、風にざわつている夜陰に響いたのは、どうも半鐘のやう……………  
火事ぢやないか……………半鐘だ……………火事だ  
……………それ起きて見ると、東の窓の戸を一枚あけると、燃えたり々々々、火元は坂町の中程と見え、炎は空にみなぎ



つて東南の空は唐紅、

こりやかうしちや居られねえと云つて、さしこでもひつかけて、すぐ様かけつけても行く場なんだが、意気地のないのは情ないもの、寝衣の上へ綿入一枚羽織つて、駒下駄をつゝかけながら門の前へ出て見る、火は四方に広がつて、風が吹くと炎が一方になびき、風が絶えると炎が乱れて、四谷坂町坂の上暫く咲くや江戸の花、

(はるさむ「江戸の花」『輔仁会雑誌』第六十五号)

明治三十八年三月)

日かげうらゝかな春の畑は、麦男と云ふ男と、鈴菜と云ふ女と二人で居る所なのです。

麦男は冬の初、木の葉が散つて霜が降り初める時分に、硬い地面から生れて、身をきるやうに寒い風や、體がこどえるやうにつめた雪やなんかの中で、大きくなつたから、丈夫な強い男となりました。さうして春の女神から、穂といふ尖い鉾を戴きました、鈴菜は春の初、若草が萌えて遠山に霞がかゝる時分に、やはらかな土の中から芽を出して、そよ／＼とぬるく吹く風や、しよぼしよぼと土を湿す春雨なんかの中で育つたから、すなほなやさしい女となりました、さうしてこれは又春の女神から、花と云ふ美しい簪を戴きました、

此の二人は小さい時から、極仲のよい友だちで、互に慕ひあつて居たのです、

(はるさむ「春の畑」『鼓舂』 同前)

「江戸の花」は(火事と喧嘩は江戸の花)にちなんだ題で、文体は近世の戯作調だが、あるいは、講談もしくは落語など、オーラルな表現からの影響が入っているかも知れない。利玄は、娘義太夫や落語が好きで、志賀直哉らとよく寄席に通っていたという。それに対し、「春の畑」の方は一転、非常に優しい語り口であり、平易でこなれた口語表現は、大正期の(赤い鳥)系の童話につながるものを感じさせる。

しかし、やはり木下利玄の真骨頂は、短歌にあると言えよう。無論、まだ、後年の代表作の「曼珠沙華の歌」(連作『みかんの木』収録)に見られるような、情景描写を突き詰めて言葉凝縮してゆく緻密な表現力には及ぶべくもない。だが、まだ十八歳そこそこという年齢ながら、普通の人ならば見過ごす点景を短歌のフレームに的確に収めており、また、極力イメージをクリアにしてゆこうという意思が感じられる。

寒けさに衾やあるとめさむれば夜は明に近し関が原の駅  
(汽車中にて)

やどりたる山本村は秋まつり神楽の鼓音賑はしき

まばらなる星のあかりに岩角の百合の花白し宵やみの道  
羅生門鬼の出づべき時を近み薨の月に人の影もなし

(はるさむ「羅生門」より 『輔仁会雑誌』第六十三号)

南うけて冬あたゝかき磯村の道に咲きたり水仙のはな  
秋の蝶低くさまよふ叢に野菊露艸花のちひさき

秋まつり昨日はてたるうふすなの森の梢に百舌鳴きしきる  
のる駒の白きたてがみ紅葉散りて夕霧深し足柄の山

(はるさむ「水仙花」より 『輔仁会雑誌』第六十四号)

喩えていうならば、武者小路が「調子外れの声」で叫ぶ性質だとすれば、木下利玄は、高音から低音まで響く美しい声で様々なジャンルの歌を歌い分ける、卓越した歌唱力の持ち主であったと言えるであろう。

また、当時の彼は、先に挙げた雅号の他にも、里呆(あだ名の「利公」から、小青(「情」という字を二分したもの)、木の子、木ノ、等の名で硬軟様々な文章を発表していた。ある意味、文学好きの友人たちの中でも、雅号や別名をつけることに最も楽しみを見いだしていたのは、木下であったかも知れない。

### c 志賀直哉

その利玄や正親町と親しくつき合っていたのが、落第生として

武者小路たちと同学年になった志賀直哉 明治十六・一八八三(昭和四十六・一九七一)であった。「志賀は僕より二つ級が上だった、二度落第して六年級の僕の級になった。(中略)頭はわるくないのだが、怠け者だったらしい」(武者小路実篤「白樺を出すまで」『白樺』大正六年十二月)

スポーツは全般得意で、棒高跳びから野球、ラグビー、ボートまで、何でもござれの活発な少年であった。スポーツを通じて沢山の友だちを持ち、さらに、その交友の輪を大きく広げてゆく才能にもたけていた。

家柄は相馬藩(福島県)の土族である。本来の家格はそれほど高くないが、祖父の志賀直道は、幕末に藩主・相馬家の家令をつとめ、維新後には、疲弊した相馬家の再興を託されたほどの信望の篤い人物であった。また、父親の直温も明治の半ばに実業家として成功を遂げたので、直哉は他の学習院生に何の引け目も感ずることなく、裕福な環境で成長した。ただ、不幸といえば、十二歳の時に実母が早世した事と、父親と性格的・価値観的にそりが合わず、しばしば衝突していたことであろうか。

成績は本来は良い方であり、よく読書もしていた。十七歳頃からはキリスト教伝道者にして思想家の内村鑑三(文久元・一八六一)と昭和五・一九三〇)に入門し、直接教えに接してもいた。だが(学校)がとにかく大嫌いで、その気持ちは生涯続き、晩年に至っても、世の中に「学校好き」の人間がいるなどとは信じら

れないと言っていたという。そのため、授業を真面目に聞くことはあまりなく、たいていは、正親町や木下ら、文芸好きな五人の仲間と「授業の時間に紙切れに何かかいてぐるぐるまはしてよろこんでみた」(『或る男』八十八)。そして「先生に怒られると黙つてすまして室から出ていつたりしてみた」(「白樺を出すまで」)。一口に言えば、志賀は、行動に奇矯な所のある、おかしな落第生だったわけである。

その志賀が『輔仁会雑誌』上で表した文章は、その大半が軽快な語り口のものであった。「銃煙欄は、他の仲間の誰にもまして、志賀が匿名でその健筆を振るつた舞台である。

#### 湯気ポツボ字名之由来

たしか二日目の行軍でした、私は追撃隊即ちこれから御話します湯気ポツボ中隊長の一隊について参りますと、そりやまあ甚い道なんです、何んでも敵の本隊の横つ腹を突かうといふ計略だったそうで——尤も前の晩十二時近くまで地図と睨合ひで小田原評議があつたんださうですが、全体申せば無理な話でさあね、実地見た事もない所を平べつたい地図で見分けるのですから——なんせい、道もない山の中へあれでも百人たらずの人がはいつたのですから、たまりません。(中略)

敵には又些少共ぶつからず、エー？敵にどうしてぶつからな

い？そりや当然でさあね、敵はどしどし本道のい、路を、しかも半時間も前に出掛けていつたんですもの、それに敵の隊長の白木さんといふのは素人にしてはまあいくらか黒い方なのですから、此方だつてたいていぢやありませんさ、(中略) さあ、さうなると妙に顔が熱つてくる、気が遠くなる、眩暈がする、油汗と冷汗とが一所になつて流れて来る、痲癢筋で額は突つ張る、腹の中では「くやしい」と「情ない」とが駈けつくらをしてる騒ぎ、何の事はない、まあ、大病ですな——

オツト飛んだ事を調子に乗つて申しました(中略)

(なかば「湯気ポツボ字名之由来」『輔仁会雑誌』第六十四号)

「くでさあね」「くですもの」「くぢやありませんさ」「オツト飛んだ事を」という言い回しが、すべて落語調である。ちなみに、この頃の志賀はとりわけ奇席と芝居に夢中になつていて、学年で二、三番の成績という優等生の木下を寄席芸能の世界に引き込んだのも、この志賀であるという。愛読書は主に江戸期作家の近松門左衛門・井原西鶴・式亭三馬・山東京伝と、明治以降のものでは尾崎紅葉・泉鏡花等々(志賀直哉年譜 世田谷文学館)没後三十年 志賀直哉展『平成十三年』。明治三十九年に夏目漱石が「坊つちやん」を発表した時には「すつかり感心して、皆にすめて歩いてみた」(『或る男』八十七)そうであるが、こうして江戸風のリズムカルな語り口が好きな青年であれば、その行動も納

得がゆく。そして自らは(ななば)あるいは(奈加葉(半月)とい  
う名で、主に(むらさき)と名のつていた細川護立ヌリと組み、もつ  
ばら、先の引用のような気楽な小話を執筆していた。

一方、武者小路は、明治三十五、六年頃の思い出として、  
「学校の校友会雑誌の輔仁会雑誌と云ふのに、六号で新四年生  
と云ふ匿名の人が、行軍で上級の人達の過当な行為を皮肉に鋭  
く生々とかいた記事が出た。それは学校で問題になったが、誰が  
かいたかわからなかつた。(中略)その記事に、学習院のなかを清  
くするのは、社会を清くすることよりも容易とは云へないやうに  
かいてあつた。そしてそれを実現する人の出ることをのぞんであ  
た。彼はそれを見た時、その望まれてゐる人は自分だと私かに  
覚悟した。その記事をかいたのは、矢張りずつとあとで聞いたの  
だが志賀だつた」(『或る男』七十六)と述べている。

だとすると、志賀と武者小路とは、明治三十五年九月に志  
賀が落第して同級となり、ほとんど交流もまだないうちに、学  
校に対して、ほぼ同質の問題意識を有していたということになる。  
後の二人の気の合い方を考えれば、このシンクロシティの可能性  
は高いと思われるが、残念ながら、この文章については、筆者は  
未確認である。

とはいえ、そうした学校批判の場合を除いては、この頃志賀が  
文章を書くと言えば、大体、ユーモア専門であつたことは間違ひ

ない。親しかった(はるさむ)こと木下に対して、例えば先に引  
用した童話調の「春の畑」への批評として、

春の畑、これは(※恋心を扱つた作品なので)御許しが出る、出  
ないで、一時大変八釜しく、とうく、会長の所まで持つて行  
つたものだ、案ずるより何んとかといふ通り、其座で御許可  
相成つたさうだが、どうです皆さん、あれがそんな問題を  
引き起すやうなものと思えますか。

兎に角中々よく出来てゐる、平和な景色を、平和な思想を  
以つて、平和な文体に現はす事に於ては本会中此人の右に  
出づあるものは恐らくなからう、これが誰も真似る事の出  
来ない此人の長所である。

(奈加葉「批評」『輔仁会雑誌』第六十六号)

明治三十八年六月)

と記している。賞めているのか、皮肉か、判然としかねる書き方  
をしているが、これも、(はるさむ) (奈加葉の署名で互いに手紙  
のやりとりをしていた間柄だからこそ出来るからかい方だつたの  
であろう。

もつとも、志賀は木下より三つ年上だが、知識で木下に叶わ  
ないのは自分でも認めており、「志賀などはかいたものの仮名づ  
かひを木下になほしてもらつてゐたやうに思ふ。試験勉強の時

も木下は志賀の先生役をしてゐたやうに思ふ」ということである(武者小路実篤「木下の思ひ出」歌誌「立春」昭和十四年一月)。いずれにせよ、壮年期の大作『暗夜行路』の文体から感じられる重厚さとは似ても似つかぬライトタッチであるが、実際、これが、まさしく二十一二歳頃の志賀直哉の文章であつた。

#### d その他

同じ時期、中等科三年生の一人が、(いさり火)の名で、「今し晃々鏡に似たらん月は澄み渡る大空高くかゝりて、遠く遠く千里を照し一條の金蛇波上を走るを見る」という書き出しの荘重な美文「須磨の一夜」を『輔仁会雑誌』第六十四号に発表し、同校の学生を驚かした。当時、まだ十四歳の若さだつた郡虎彦(こおり)である。彼は文学と語学において、典型的な早熟の天才タイプであつたが、人柄に愛嬌もあり、武者小路たちの学年には、生意気だが可愛げのある下級生として知られていた。彼は、やがて『白樺』に同人として合流することとなるが、それはまた暫く後の話となる。

他にも、武者小路の学年の卒業後は、下の世代で、後に『白樺』同人となる里見淳(本名・山内英夫、有島三兄弟の一人)・正親町実慶(公和の弟)・柳宗悦(が)が『輔仁会雑誌』の常連となつて活躍するが、彼らも、文章を書く時は、それぞれ(伊吾)(青嶋)(葛菴)という雅号を用いていた。

#### 四、不器用な演説家

さて、多彩な同級生に囲まれていた武者小路実篤であるが、しばらくの間は親しくする折りはなかつた。なぜなら、先に触れたように、正親町・志賀・木下たちの共通話題は芝居・寄席か又は読んだ本の話であつたが、実篤は、興味の違ひもさることながら、金銭的余裕がなく、興行物などには全く足を向けなかつたからである。

しかし、彼の回想によれば、はじめ正親町とだけは、一緒に同窓会の委員になつたのが縁で、明治三十六七七年頃には少しづつ芸術の事などについて話をするようになり、やがて、正親町の家遊びに行つて、絵画や書物を見せてもらうようになった。また、時には正親町に伴われて白馬会的美術展に行き、それぞれの絵について詳しく説明を受けたり、北村透谷や樋口一葉の文学について紹介されたりしたという。この時実篤は、トルストイ一点張りだつた自己の精神世界から、初めて一歩外に踏み出すことが出来たのであろう。その意味で、正親町は、彼にとって重要なメンター(導き手)の役割を果たしていたと言える。

一方、学習院では、相変わらず(演説)で目立つ武者小路であつた。

彼の問題意識については学内の共感者も少なくはなく、例え

ば、『輔仁会雑誌』第六十二号には、「武者小路君所感録批評子と意見を異にせる節もあれど快刀乱麻を断つ之感あり希くば君正義の旗を翻して本院の爲めに尽されよ」(守山の一兵卒「六十一号妄評」※本名不詳)という短評もあれば、「武者小路君の所感録、余一読案を叩いて快哉を叫ぶ」(批評子「前号批評」※本名不詳)といった、比較的長い賛意も表明されていた。

また、時には、実篤自身が相当な気合の入った精神状態になった時もあったらしく、(むらさき)子は、「誘惑」という題でなされた実篤の演説について「君は先づ第一に演壇に登つた、温厚君子的の風姿も今日何となく殺氣に満ち渡つて一言一句語劇して頗る熱心に見受けられた、演説の大意は少年の誘惑で殊に純良無垢の少年を誘惑する悪漢に向つて大打撃を加へられ、進んで快樂説に及び」云々(邦語演説会例会「同号 傍線引用者」と、その常ならぬ迫力を伝えている。

ちなみに、実篤が輔仁会における常連の演説家になつて約一年程経つ頃には、以前は聴衆の多い時でさえ四く五人、少ない時はわずか二十四く五人であつたが、今回は八十人が聴きに来てくれた(「邦語演説部例会」『輔仁会雑誌』第六十四号)と書かれるほど、演説会は次第に盛会になつていたらしい。

さらに、この時期以降には、例会報告の記事に「院長閣下」や「諸先生」が出席して「場の一隅に悠然坐せられ」(同前)云々の記述が散見されるようになる。別段、それで何事か注意された

という記事も回想も残つておらず、また時によつては、出席すると云つていた教師が時間に間に合わなくとも話を始めていた、という一文なども見えるので、多分教師たちも、指導者や顧問としてではなく、観客として、活氣の出できた邦語演説会に関心を持つようになったものと思われる。これも、一種の、武者小路効果と言へるものであつたかも知れない。

だが反面、実篤は、巧妙に自己演出した雄弁術で大向こうから喝采を受けるような、いわゆる劇場型の語り手ではなかつた。それどころか、うまく話がまとまらないことも珍しくない。

善とは何ぞ……武者小路実篤。前日迄演説する積りで居られなかつたが此日午前二時に起きて急に思ひ出して腹案されたと云ふことだ、其為めかあらぬか、本日氏が説かれた、(夏休に愛読された書物の紹介)ものは其後半甚だ了解するに苦しむ個所が少くなかつたのは頗る遺憾とする所だ。

(「邦語演説部例会」『輔仁会雑誌』第六十四号)

(傍線引用者)

開会之辞(武者小路実篤君)

武者君は新任委員で斯道の名士といふより寧ろ、熱心家、忠実家であるから、此度は氣焰とはいかずとも、少なくとも、

なにがしの希望なりと述べらるゝ事かと思ひきや、壇に登らるゝとすぐ

「これから邦語会の例会を開きます」

いさゝか「月が鳴いたか時鳥」の感なき能はずだつた。

其所で評者も、一言、

「然し、あれも反つて可さ」とのみ評して置かう。

(「邦語演説会例会略評」『輔仁会雑誌』第六十六号)

傍線引用者)

演説で一目置かれてゐる自分が口火を切るのだから、ここは場を盛り上げよう、ということすらしない。

確かに彼は、子供の頃から、「化石したやうな言葉は嫌ひである。意味ありげな、勿体ぶつた言葉は嫌ひである」『或る男』六十七)という性格であつた。行軍演習の時も「学習院の行軍は何処までも軍隊式であつた。一々報告をする時も気を附けをして軍隊の言葉をつかはなければならなかつた。しかしそんな馬鹿な文句を彼がどうして知つた人間の前で云ふことが出来やう」と反発し、中隊長役の上級生に偵察の報告を求められると、立ち止まることなく「あないよ」と言い捨て、そのまま通り過ぎた(同前)ので、級友の間では語り草になつてゐた。

その意味では、(素)の自分である事にあくまでこだわるといふ、一種の潔癖症であつたわけだが、それにしても(場)の空気を考

えなさすぎる。その点、当時の実篤は、相変わらず、自己表現に難があつたと言えよう。

### 五、初めての(親友) — 上田敏招待にまつわる一挿話 —

ところが、その実篤に、或る思いがけない転機が訪れる。

明治三十八年九月、高等科三年になつた年に、武者小路実篤と志賀直哉とは、同じ(輔仁会研究部)の邦語委員として名を連ねることとなつた(『輔仁会雑誌』第六十七号 明治三十八年十二月)。

なお、この時、同会編纂部には正親町と木下、児島喜久雄が入つた。また、十一月には正親町が役を退き、代わりに、柳宗悦と郡虎彦が加わつた。この児島もまた、下級生で、学習院で最も画才のある少年として知られており、十二・三歳頃には『明星』誌に投稿した挿画が掲載され、すでに大人と見まがうばかりの絵だと話題になつてゐた(白樺を出す迄(二))。彼も後に『白樺』に参加することになる。まだ各自が意識すらしないレベルにおいて、彼らの未来は、着々と形づくられていた。

さて、その年の十月五日に行われた邦語部例会の準備の際のことである。外部講師を依頼する話になり、志賀直哉は、当時、東京帝国大学講師で、すでに翻訳詩や評論で著名となつてゐた

上田敏(明治七・一八七四〜大正五・一九一六)を呼ぶ事に決めた。実篤は志賀にまかせて安心しきつており、また、上田敏からも「すぐに快諾の返事が入った。万事順調に進んでいたが、ある日、志賀は突然、学習院長の菊池大麓に呼び出され、『文学者はどんなことを話すかわからないから、断るよう』」と駄目出しをされてしまった。志賀は「本当は(自分が師事している)内村鑑三先生を呼びたかつたのだが、学校が承知しまいと思つたから上田さんにしたのに、その上田さんも断れというのだからひどいよ」と憤慨したが、『思い出の人々』、状況は如何ともしたがたかつた。かくて二人は、上田敏に謝罪するために、雨の中を徒歩で出掛けることとなった。

実篤が、志賀に「友だちになつてほしい」と言われたのは、まさに、この道すがらのことである。

「その時、始めて志賀が、有島(※生馬)<sup>\*15</sup>が西洋へ行くつてから、本当に心を打ちあけて話す友達があつたので、彼にさう云ふ友達になつてほしいやうなことを、何かの話のついでと云つた。このことは彼には意外であつたと同時にうれしかった。彼は志賀にはよき友の多いことを知つてゐた。(中略)志賀には有島以外にも多くの友があつて、親身になつてお互に助けあつてゐることを彼は知つてゐた。処がその志賀から、彼は信用されたので、彼はよろこんだ。そして二人で興奮して、雨がざあ／＼降る中を、番傘一つを

さして、話しつゞけ

て出かけた。電車にもわざとのらなかつた(『或る男』八十九)。

それまで、誰からも積極的に(友だち)だと言われたことのない青年が、しかも、性格的にも表現能力的にもまったく自分と対照的だと思つていた級友に、突然の友情を表明されたのである。実篤は、生涯のうち、この日の事について幾度か記しているが、確かに、それはあたかも、一人大声で叫ぶしかなかつた彼にとつて、世界と自分との関係性がまるで変わった日のようにも思えたことであろう。事実、その日以来、実篤と志賀直哉とは、志賀が八十八歳で世を去るまでの六十六年間、変わらず親友であり続けた。

また、上田敏の方も、訪ねてきた彼らを喜んで招き入れ、断りの旨を話したところ、多少残念そうにしたものの、気持ちよく応対してくれた。最初は、用向きが用向きだけに緊張していた二人も、次第に心が軽くなり、様々な事を話した。その時、武者小路は「先生のお好きな作家はだれですか」と尋ね、神秘主義的宗教思想家にして劇作家・詩人であるモーリス・メーテルリンク(一八六二〜一九四九)の事を紹介された。

メーテルリンクは、理性や規範よりも、人間が本来持つてゐるはずの(叡智)や(神性)を重視し、例え初めは卑俗な愛でも、その愛を深めれば人はより精神的に向上し、真の愛に近づくと



う信念を有していた。帰宅してから、そのドイツ語版の著書を読み読んだ実篤は、そうした新鮮で柔軟な世界観に触れ、トルストイ独特の深癖な理念性に捉らわれていた自分をようやく解放することができた。メーテルリンクの思想は、実篤を、演説家・啓蒙家から、より文学的・芸術的な創作者へと向かわせる方向に作用したと言える。

「人生にとつては何が幸いするかわからないと僕には思われるのだ。志賀が上田さんに講演を頼まなかったら、そしてそれを院長さんに断わられなかったら、僕は志賀と上田さんを訪れることをしなかったであろう。もしたら、ちょうどよきときに、メーテルリンクのことを知ることはできなかったろう」(『思い出の人々』)

一つ、上田敏について言い添えておくと、彼は、日本近代詩史の中で、非常に特異な位置にいる人物であった。

彼は、祖父が、福沢諭吉らと共に渡欧した外国奉行配定役・上田東作、父が渋沢栄一と渡欧した上田綱二<sup>（いけいじ）</sup>、そして母方の叔母は十六歳で津田梅子らと一緒に日本初の女子留学生としてアメリカに渡った上田悌子という、非の打ち所のない外国語環境の整った家庭で育った。そして彼は、長じて後、西欧の詩の香気を巧みに日本語として訳しこなすと同時に、西欧詩独特の語気や余韻までも日本語に取り込み、(新時代の日本の詩表現)と

して同時代の詩人が憧憬するまでも、その表現の質を高めた。年少の頃から何の心理的障壁もなく多言語環境を受け容れていた彼だからこそ、なし遂げ得た成果であろう。ちなみに、実篤ら二人が訪れた直後の明治三十八年十月は、ちょうど、彼の業績を代表的する訳詩集『海潮音』が出版された時である(三十一歳)。

だが、上田敏の特色は、それだけではない。実は彼は、詩(あるいは文学)の歴史の中で重要となる人物と、非常に数多く、人生の中で接点を持っているのである。

例えば、十七歳(明治二十五年)で基督教第四回夏期学校に参加した際には、島崎藤村・戸川秋骨と一緒になっている。東京帝国大学に入學した時は、雑誌『帝國文学』の発刊に際して高山樗牛や姉崎嘲風らと共に発起人に名を連ね、その六年後の教師時代には、登張竹風・笹川臨風・武島羽衣らと、同誌の編集委員も勤めている。同じ東大の教師であったよしみで、上田敏の名は、夏目漱石の『吾輩は猫である』の中にも登場する。二十歳の時には、馬場孤蝶・平田秃木に誘われて樋口一葉を訪ねたこともある。与謝野晶子の『みだれ髪』が世間を騒がせた時には、その詠歌を的確に評価し、優れた鑑賞眼の持ち主である事を世に示した。与謝野鉄幹とも、それ以前からの知己であった。その他、明治三十八年には石川啄木の詩集『あこがれ』に序詩「啄

木」を寄せ、時は下つて明治四十二年には、(パンの会)において當時氣鋭の青年詩人、木下李太郎、北原白秋らの歓待を受けている(三十四歳)、等々。

同じ表現傾向にある仲間を中心として知人の輪を広げるケースならば、さして珍しくはない。だが、そうした枠組みとはほとんど関係なく、これだけ多くの詩人たちと、しかも四十二歳で没するという長からぬ一生の中で知己となつてゐるという事は、相当に稀なことではないだろうか。もしや、上田敏は、ある種運命的に、(彼以前)と(彼以降)の詩人をつなぐ結節的存在になつていたのではないか、という風にさえ思われる。

そして、そのような観点から見た場合、この時点ではまだ詩人の卵でさえなかつた武者小路実篤が、たつた一度だけ上田のもとを訪問し、新しい人生觀のヒントを得て喜んで帰つたということにも、偶然とは断じ切れない不思議な縁を感じざるを得ない。いわばこの日、上田敏は、彼自身も気づかぬまま、一人の若者を、未来の口語詩人となる長い道のりへと送り出したのである。

#### 六、(語る楽しさ)を発見した青年文人たち

さて、志賀とつき合うようになってからは、実篤はさらに様々な文学に目を開かれることとなつた。すでに自分の本棚に一杯の本を持つていた志賀は、尾崎紅葉の『多情多恨』や泉鏡花の『湯島詣で』を実篤に勧めたという。「両方感心したが、『湯島詣で』

を読んで、日本語も自由にかけるものだと思つた」(『思い出の人々』)。今まで自分が考えていた以上に、日本語の文体は、自由度の高いものではないだろうか。明治三十八年、二十歳の實篤の認識は、ようやくその地点にまで達しようとしていた。

従来は武者小路研究も、この点については指摘をしてきた。つまり、「文芸好きな同級生の影響を受けて、武者小路もまた、本格的に文学への志向を持つようになった」ということである。

ところが、同時期の『輔仁会雑誌』を読み進めてゆくと、或る興味深い事に気づかされる。それは、精神的な変化は、かならずしも、友人↓武者小路へという一方向的なものだったわけではなく、逆に、武者小路からの影響を受けて友人たちも変わった面も少なくないのではないかと思われる、という事である。ここでは、雑誌記事をさらにピックアップしながら、彼ら全体の変容について考察してゆきたい。

変化は、まず、明治三十八年の後半に訪れた。

その年も、従来と変わらず、輔仁会大会や邦語部例会があれば演壇に立つていたと思われる実篤に、これまでになく丁寧な批評と賛意を表した一文が寄せられたのである。

処生と善(高三、武者小路実篤君)

これは又一段と結構で、今日中での白眉ばかりではなく、

今迄私の聞いた同君の演説中での白眉と信じて疑ひません、第一議論が痛快でありました、今日世間に知つた風な事を云つてゐる人は多くありますが、これだけしつかりした考をもつてゐる人は少いでせう、第二論旨が明晰でありました、いつも同君のはどうかすると、話の筋が分りにくいやうな事がありましたけれど、今日のはそんなのは雲泥の差、第三氣がありました、これは熱心に話されたからであります、只態度が窮屈だつた事は玉の瑕で、うたてき次第でした。(中略)

(はるさむ「批評」『輔仁会雑誌』第六十七号)

(はるさむ)の名が示すように、これは木下利玄の文章であつた。

これまでも引用してきたように、『輔仁会雑誌』の中で、学生が、互いの文章や演説内容に対して意見を言い合うのは、ごく普通の事であつた。だが、そこは学生同士の間柄であるから、賞めること半分、遠慮のない辛口の批評が半分、というものが多い。ストレートに賛辞を呈している文章は、むしろ稀である。

ところが、木下のこの批評文は、きわめて明快に、実篤の演説について「同君の演説中での白眉」議論が痛快でありました、「これだけしつかりした考をもつてゐる人は少いでせう」と賛同の意と賞賛を表明している。これは、同雑誌の批評欄として稀なだけで

はない。木下生来の温和で控え目な性格からいつて、これだけつきりと、他人について自分の意見を言い切ること自体、稀な事であつたと言える。

残念ながら「処世と善」という演説は、この号にも、その前後にも掲載されていないため、木下が実篤の言葉のどの辺りに感動したのかは、具体的にはわからない。

だが、実篤にとつて、木下は、ある意味志賀直哉以上に、表現者としては自分と真逆の、校内一の卓越した存在だと感じていた相手であつたはずである。その彼が、「武者小路君の今回の演説は素晴らしい」ということを、全校生が目にする『輔仁会雑誌』で明言してくれた。それは、単に、面と向かつて、「良かったよ」と言われる以上に、実篤にとつてはインパクトの強い出来事だつたのではないだろうか。

実篤は、木下とは「一番古い友達でありながら(中略)親しい友になつたのは僕が大学をやめてからだ」(「白樺を出すまで」と回想している。だが、おそらくこの批評文は、その前の時点で、実篤に木下への友情を意識させる一つのきっかけであり、二人の友情の新たなステージの出発点となつたことと思われる。

常ならぬ出来事は、それだけではなかつた。

明治三十九年二月二十二日の輔仁会邦語部例会のことである。この日は、また演説者が珍しく十名も参加していた。その内、

ひとときわ異彩を放ったのは志賀直哉で、彼は登壇すると「世の中で、資本のいらぬ贈り物とは「よろしく」である」と言い放った。開口一番これでは、意味がよくわからない。

よろしく 高三 志賀直哉君

先づ第一に世の中で資本の入らない贈物は「よろしく」である、と云つて聴者を驚かし、或は、人はけちな動物で、そのくせ物を遣つたり貰つたりするのが好であると云ひ、それ故に「よろしく」が流行すると説き、「よろしく」は誠から出るものでないと云ひ、色々の例を挙げ、或は「よろしく」を別つて、伝へべき「よろしく」と、だまつてゐていゝ「よろしく」があると云ひ、「よろしく」は三者の間に行はれるのだから第二者が正直な人だつたら

荷やつかいです、頭の中で

と云ひ、しかし資本がいらぬから「よろしく」は偽善であると云ふのではない、誠が無いから云ふので、誠があれば資本がなくつても、高尚な贈物であると説き、よろしくに口と心がある吾人のは口で聖人は心であると説き

聖人は心に「よろしく」を持てゐて口には持てないのですと云ひ、吾人の慈善は良心を麻酔するものであると看破して壇を降りられた、

(直線生「批評」『輔仁会雑誌』第六十八号)

明治三十九年三月 ※本名不詳

〈直線生〉の要約の仕方にも難があり、やはり意味は判じがたいが、意味の欠落を補いながら大意をまとめれば、次のようになるであらうか。

「人は、何かという他人に「よろしく」などと言う、それは、ある意味一銭もかからぬ他人の贈り物となるからである。そして、一般的に我々の間で挨拶代わりに行われる「よろしく」は口先だけであり偽善である。しかし、本当の誠意がこもつていて、心から発するのであれば、それは高尚な贈り物となり得る。」

〈直線生〉によると、「志賀君の演説は大言壮語はしないが、一種のくせある人の心を引く声でなかく、警句に富んで」いたそうであり、「態度は何処がわるいと云ふことは覚えて居ないいや気がつかなくつたが、いゝとも云へない、だが「演説の主意は誰でも賛成のことと思ふ」と結んでいる(同前)。

志賀はそれまでも、一応は邦語部例会で演説者として語つたこともあつたが、本人に熱意が乏しかったせいか、「論旨は中々よいが、その態度はあまり感服出来なかつた」(里川「邦語部例会雑感」『輔仁会雑誌』第六十五号 ※本名不詳)などとして、批評欄でも詳しく紹介されることはなかつた。

しかし「よろしく」では、明らかに、冒頭部から一瞬で聴き手の注意を惹きつけるため、自分から取上げて仕掛けている。また論

旨としても、意図的に、通常は使われない言い回しを選び、そして相手を煙にまくぎりぎりの所で、結論部を警句的に語り収めている。かなり人々を食った内容ではあるが、見方を変えれば、それまで実篤が語り続けてきた、生真面目な（演説）の基準を百八十度回転させたものとも言える。

そして実はこの日、もう一つのアクシデント的な出来事があった。それは、中等科六年生の児島喜久雄が「忘れられたる輔仁会雑誌」と題して、今度の同誌には現在のところ殆ど投稿がない、皆は同誌の事を忘れてるのであるとか、という事を、巧みな比喩を交えて論難したのに対し、高等科三年の裏松友光（実篤のいとこ）が、何と飛び入りの演説者として壇に上がり、「児島君の演説に就て一言云ひたい事がある」とやや憤然とした調子で反論。その後またすぐに児島が登壇し、裏松に反論し返すという流れで、つまりは、これまでの輔仁会の演説会ではあり得なかつた（討論）が行われたわけである。

とはいえ、別にとげとげしい論争が繰り広げられた訳ではない。裏松の方は多少ムキになったくらいはあったが、その憤慨ぶりがかえつて聴衆の爆笑を誘う場面があったようであるし、さらに再反論した児島も、年若い割には、絶妙なユーモアとウィットで切り返すという大人のな対応をとつたため、皆は大いに沸き返つたらしい。「要するにこの例会をして前代未聞の愉快をあらし

めたのは一つに二君の御蔭である」（同前）。

そして、例会が終わりを告げる時、志賀が再び口を開いた。

閉会の辞は志賀直哉君がされた、皆いや、自分ののをのそいで大層面白かつたと云ひ、児島君と裏松君の即座の討論ですらあのやうに愉快だつたから、ほんとに討論をやつたらどんなに愉快だらうと云ひ、ちがふ級同志でやるのはとにかく、各級で同級同志で討論をして戴きたいと云ひ、高三では今日する心算だつた出演者が多かつたからやめたが、こんどは今の所ではする心算であると云ひ、例の通り茶菓がありますから、と云つて壇をおりた、時に四時半（？）談笑と共に茶菓は胃の中に入るべくよぎなくされて、胃の承知を得たのち三々伍々家路に就た、かくて楽しき会は終つた、

（同前）

この「討論会をしたい」という志賀の希望は、翌三月十三日の邦語部例会において現実となつた。その日、個人演説としては武者小路実篤の「エマーソンの自信論梗概（朗読）」、志賀直哉「長生」等、七名の演説が行われたが、その後のプログラムとして「討論 田舎生活と都会生活」が組まれており、議長は裏松友光、討論メンバーは細川護立・徳川慶久・斎藤博・武者小路実篤・川

村弘・正親町公・志賀直哉・木下利玄であったことが記録に残っている(邦語演説会)『輔仁会雑誌』第六十九号 明治三十九年六月)。

これら一連の動きは、なにを物語っているのであろうか。

おそらく、ほぼ確実に言えることは、実篤が毎回毎回、下手であろうと、態度が堅苦しいと人に思われようといひ続けてきた(演説)というオーラルな表現に対し、若き文人(または戯作者)集団であった志賀や木下らが、次第に強い関心を抱き、やがて自分たちの表現として消化し取り入れようとしたのだ、という事である。

彼らは、武者小路の(文体)を真似たわけではない。武者小路も同様であり、彼らの中の誰かの(文体)や(表現)を取り入れたことはなかった。

だが、武者小路が、ある時期から積極的に、正親町や志賀の芸術観や読書傾向を自分なりになぞり、追体験しようとしていたように、巧みに文を草し和歌を詠むことうたで満足していた青年たちの方も、(人前で語って意見を表明するのも面白いかも知れない)(その上討論が出来れば(つまり、主張するだけでなく「ミニミニ」出来れば)もつと楽しいだろう)という方向に、気持ちが変わりつつある。言い換えれば、それが彼らにとつては、まさに(武者小路)という不思議な(現象)を自分たちなりに追体験

することだったのでないだろうか。彼らは、まさに、インタラクティブに変容を遂げたのである。

先に挙げた、三月十三日の討論会。それは、最高学年の彼らにとつて、学習院において初めて最後の討論会であったと思われるが、その中に、武者小路も一参加者として名を連ねていること自体、非常に象徴的と思われる。

そして、このように、互いに本質的な意味で受容し合うという精神体験を通して、実篤の文体もやがて大きな変化を遂げてゆく。

彼はその後、学習院を卒業し、一時は帝大で学ぶものの飽き足らず、翌年には中退して、志賀・木下・正親町らと創作の合評会(十四日会)を結成。また、彼自身はその次の年(明治四十一年)に、自費で最初の短編集『荒野』を刊行した。

一般の批評家からは酷評を浴びたものの、仲間には皆、その真価を疑うことはなかった。また、学習院の後輩たちからも親しみと尊敬を受ける事こととなった実篤は、明治四十二年三月、卒業生として、論説文「貴族主義」を『輔仁会雑誌』第七十七号に寄稿する。その文体の変化を、在校中最後の投稿「如何にして世は改良せらるるか」と、実際に比べて見てほしい。

現代の社会に満足を持たざる者は、世を如何にして改良す

べきかを考ふるなるべし、しかして恐らくはその難きに失望落胆して世は救ふ可らずと叫びて、濁流と共に流れて、一日も心に休みなく遂に死の海に流れ入らん、嗚呼果して世は救ふべからざるか、余は之れを貴族を無意味なる生活より救はんとしつゝあるトルストイに聞かんと欲す、

（如何にして世は改良せらるゝか）

『輔仁会雑誌』第六十七号）

自分は個人主義者である。同時に人類主義者である、しかし実行の主義としては自分は貴族主義者である即ち眞の意味に於て貴族主義者である（中略）

さうして過渡時代なる現代は貴族主義を最も要求してゐる、しかし自分のこゝで云ふ貴族主義は元より人爵上の貴族主義ではなく、天爵上の貴族主義を云ふのだ。釈迦の死に近い時の僧侶即ち元始的僧侶は自分の云ふ貴族である。自分を高くし凡人を超越して凡人を憐み、愛し、導く人が天爵上の貴族である、貴族主義と云ふのは先づ第一に自分がこの天爵上の貴族になり、さうしてこの貴族をつくることが最大急務だと云ふことを信ずる主義である、

（「貴族主義」『輔仁会雑誌』第七十七号）

## 七、飛翔した（言葉）

友だちは、自分の本質や価値を知ってくれている。そして自分は、その友人に受け容れられている……。その実感が潜在意識的に作用し、武者小路の文章表現を、ごく平明なものへと変えていった。もう、これまでのように、不特定多数の誰かに、声高に自分の意見を述べ立てる必要はない。なぜなら彼は、今や、誰と面と向かつていない時でも、心の中に（友人）という聞き手を措定する事が出来たからである。

ちょうどその時期と重なるように、——というよりも、正確には、先に述べた明治三十九年三月十三日の（討論会）の直後から、武者小路が、彼の最初の日記を書き始めているという事実も興味深い（現存する日記の開始日は同年三月二十日、『彼の青年時代』というタイトルで大正十二年に叢文閣より刊行）。武者小路は、後にそれを収録した『武者小路実篤全集 第二十二巻』『新潮社 昭和三十一年』（後書き）で「日記は減多につけない。こゝにのせたのが僕のつけた日記の全部である」（傍線引用者）と書いているので、つけ始めの日は、おそらく現存する日記本文の冒頭の通りだと考えられる。

おそらく、その少し前より、武者小路は、非在の（父）に近づこうとする孤独で内攻的な努力の日々から、徐々に、より開かれた関係性の方向へと向かいつつあったのであろう。それが、明治三十九年三月のこの時期に、ついに、（友人たちと自分）という対等な関係意識の世界へと、完全移行を果たしたのだと言えよう。

この、彼の若き日の日記には、もはや、難解で演説的な言い回しは見られない。書かれているのは、自分の日常、社会観や信念、友人との行き来、心に秘めた恋、等々である。そしてまた、この日記の中に、彼は「よいよ(詩)」を書き始める。

とはいえ、この段階ではタイトルもなく、本当に「詩を書こう」という明確な意思があったかどうかは定かではない。ただ、確かなのは、「書く」という行為を行っている彼の胸中に何らかの心の高揚があった時に、その言葉は、日記の(地)の文から分かれてまとまり、少しずつ飛翔しはじめていたことである。

弱き者よ、立て！

立て！弱き者よ、

奴隷の境遇より、

自由の身に。

汝よ、なが故に頭脳を持ち、

なが故に精神を持つか。

知れりや、これ汝、

奴隷ならざるが故に。

(「彼の青年時代」の中で最初に見られる詩の冒頭部)

明治三十九年六月九日)

彼女は去るよ〜、

美はしき姿を、我が脳に印して、

死する迄彼女に逢はずとも、

死する迄彼女を忘れじ。

(同前 同年六月十日)

ところで、読むとすぐに気がつくと思われるが、この場合の詩の言葉は、まだ依然として明治中期的な文語調である。例えば二例目の「彼女は去るよ」であるが、その直前の日記文は、「夕食の時久しぶりで、M(※二人目の片思いの相手・小間使いのまき)の笑ひ顔を見、優しき言葉を聞く事が出来た。(中略)明日家に帰ると、一生Mとは会ふ事が出来まい。異様の感じもする」と書かれている。詩と地の文では、文体がはっきりと断絶している。

武者小路はこの後も折りに触れて詩を書きためてゆくのだが、特に初期の恋愛詩に限ると、オーストククスな、『明星』的と言ってもいいような新体詩形式に終始している。「目と目と囁く、星と星とひらめきあふ如く、／この時、いなづまの如、／恋の矢は二人の胸を射ぬけり。／二人の胸か、一人の胸か、／彼も知らず。彼女も知らず。」(日付 明治三十九年十一月十日 『或る男』九十六)。また、『白樺』第一巻第一号(明治四十三年四月)に掲載した三つの恋愛詩(「我にたよれ」「二つの歌」「二人」)も、あまり前者と変わらない文語詩であった。おそらくこの時点で、武者小



路を「新しい詩人」として認識した読者は、誰もいなかったに違いない。

武者小路の詩が人々の目をひきつけたのは、恋の歌ではなく、むしろ失恋を率直に書いた詩「秋が来た」『白樺』第一巻第七号 明治四十三年十月)である。

秋が来た

涼しい秋が来た、

淋しい秋が来た、

彼女なつかしい秋が来た。

彼女を恋し始めたのは秋だった。

彼女を恋してゐることを母に打ちあけたのも秋だった。

彼女の遠くへ引越したのも秋だった。

さもなくも秋は淋しい時だ。

秋が来た、

その秋が来た、

去年の今自分は毎日彼女の姿を見た。

今年には彼女を見ずに秋をすこすのだ。

何のてらいもなく、ごく当たり前の言葉で、恋する女性が去つ

たことを書き表している。彼は(化石したような、意味あり気な、勿体ぶつた)言葉が嫌いであつたにも拘わらず、いざ、詩らしきものが作れるようになってからも、形式と先入観に縛られ、旧態然とした詩しか書けなかつた。しかし、淋しさ・悲しさ・落胆等の(あるがままの心情と状況を平常の言葉で己れの心から取り出し、対象化出来るようになった時に、初めて、(武者小路実篤)しか書けない素裸の詩が、彼に詠えるようになったのである。

自分は裸体をもつてほごりたく思つてゐるのだ。

純金ならば鍍金(めっき)はいらぬと思つてゐるのだ。

(「誕生日に際しての妄想」部分 『白樺』第二巻第六号

明治四十四年六月)

彼は、詩人として一度も雅号を用いることはなかつた。<sup>\*17</sup>小説家としても、ペンネームは使わなかつた。それは、彼自身がそれを欲しなかつたからだけではない。彼の詩自体が、そうした種類のフィルターを必要としない、(素)のままの詩であつたからである。そして、武者小路の出現以降、本名で詩を発表する詩人は、確実に増えていった。

この武者小路の表現の変化について、青年期に繰り返された失恋に帰するのはたやすい。従来は、ほぼそれが大前提であるか

のように、恋愛を原因とする見方がとられてきた。

だが、今回本論の中で見てきたような、学習院の友人たちとの不思議な友情の経緯を知った上で見ると、武者小路の詩からは、また、別なアスペクトが浮かび上がつて来る。それは、彼の精神に刻まれた、友情の証<sup>あかし</sup>である。

自分に

自惚れるく

傲慢になれく

君は小さくならなくつていゝ

どんくゝ進め、

かう云つてくれる人がある。

自分の目に涙があつた。

（「鼓舞してくる人」『白樺』第二巻第七号

明治四十四年七月）

実篤が小説『お目出たき人』への酷評を受け旅先で打ちひしがれていた時にも、友人たちはまるでそれを察したかのように、励ましの手紙を送ってくれた。「或日志賀と柳から同時にハガキが来た。柳のには『志賀とあつて今の世に君程失望しなくつていゝ人間はないと話しあつた』とかいてあつた。志賀のには、『後でうける復讐を君は前に受けてゐるのだ』とかいてあつた」（『或る男』

百三十四）。

自分のやうに他人に嫌はれていゝ

人間は少ないと心の底から思ふ時に、

他人に親切にされると

心の底から嬉しい。

涙が出てくる。

この涙あればこそ

自分は淋しい世界に生きてゆける。

自分はこの頃淋しいのだ。

（「他人の親切」『白樺』第二巻第六号 明治四十四年六月）

我を鼓舞してくれる、

我と歌を合せてくれる、

我と共に舞踏<sup>おど</sup>してくれる、

少数の若き人々よ。

兄等<sup>にいぢ</sup>は我が力の泉なり、

恩人なり、

我に生の価値を与ふるものなり、

我は常に

感謝を以て兄等を思ひ

誇を以て独語す、

「我が道はあやまりならず、  
我は孤独にあらず」と。

（「我は孤独に非ず」 同前）

詠うことが出来なかつた不器用な自分を、時間をかけてでも理解してくれ、仲間として手をさしのべてくれた。それらの友人たちは、まさしく（我と歌を合せてくれる）（我が力の泉）であり、（我に生の価値を与えてくれる恩人）であつた。それは彼らに、武者小路の真摯な情熱が伝わつたからであつたが、武者小路の側にしてみれば、それは、まさしく、人生の奇跡だったのである。

この友人観は、のちには（人類）的な（兄弟姉妹）観として高度に理念化されてゆくが、最初に友に受容されたと実感した時の感動は、彼の晩年の作にまでも残り続けている。

実篤の詩は平易だが、その言葉は、友情への感謝と感動を原動力として飛翔している言葉である。その心の高揚が、彼が選んだ最も真率な言葉と共に伝わってくるからこそ、武者小路の詩は、今もなお、我々の前に（詩）として在り続けているのであろう。

【注】

1. 『或る男』新潮社 大正十二年刊行。本論での引用は、同書の復刻版（精選名著復刻全集 近代文学館 武者小路実篤著 或る男）日本近代文学館 昭和五十一年）による。

2. 明治期の学習院における学生および教師の家柄と社会的地位のねじれと、その中で学生生活を送ることの困難さについては、「学習院」のユング青年たち——『白樺』前史・武者小路実篤を中心に——（亀井志乃 岩波書店『文学』隔月刊第三卷第六号 平成十四年十一月）の中で詳述している。

3. 武者小路がその当時の学習院を回想して書いた短編小説が「小さき世界」（大正三年）である。作中で、彼は、その頃の状況を次のように記している。

「彼（※作中名は広次。武者小路自身がモデル）の級は学校で有名な溫和しい級だつた。先生仲間から評判のいい級だつた。それに反して五年級は腕白者のよりあつまりのやうに見られてゐた。学校のもてあましの級のやうに思はれてゐた。さうして實際腕力の強いものが多かつた。運動場を我もの顔にそれ等の人が一団になつて歩きまわつてゐた。さうして他の級を威圧するのに興味をもつてゐた、下の級の人達は恐れてゐた。」

4. なお、この時期の武者小路と、同時代の文芸批評家の文体・思想の共通点を考察したものととして、「世界」を憂える青年——斎藤野の人から武者小路実篤へ——（亀井志乃 『日本近代文学』第六十三集 平成十二年十月）がある。

5. レフ・トルストイ（一八二八—一九一〇） 小説家・思想家。ロシアの貴族階級の出身であり、若い頃は無自覚に特權的な生活に安住していたが、やがて自分の内部矛盾に苦しみ、宗教的改心を遂

けるに至る。キリスト教的(愛)の理念に基づく人道主義を提唱し、また多くの文学作品を著した。代表作「戦争と平和」「アンナ・カレニナ」等。日露戦争の際には徒らなナショナリズムを排した堂々たる非戦論を展開し、日本の多くの思想家からも尊崇の念を集めていた。

#### 6. 華族会館

明治七(一八七四)年に創建された、華族階級のための集会場。

公卿・大名・士族・平民等、様々な出自を持つ華族たちの団結と親睦をはかるために、西欧貴族階級における(クラブ)を模して設立された。単に社交場の機能だけではなく、講義局や翻訳局等の学問所機能も設置されており、後にこの機関を母体として、明治十(一八七七)年、華族子弟のための学校(学習院)が開校された。

7. 「正親町は僕より四つ歳上だったと思う。学習院に入る前にこの学校にいたか、小山内薫と同級だったような話も聞いた気がする」(『思い出の人々』六十九頁)。小山内薫は東京府立尋常中学校に通っていた。

8. 「正親町は天下藤次郎氏について水彩画をならつてみたが、(後略)」(『白権を出すまで』)。

天下藤次郎(明治三・一八七〇〜明治四十四・一九一三) 日本における水彩画の先駆者の一人。画塾・出版活動・各地での講習会等を通じて、水彩画の普及につとめた。雑誌『みづゑ』の創刊者。

9. 佐佐木信綱(明治五・一八七二〜昭和三十八・一九六三) 歌

人・歌学者。和歌を高崎正風に学ぶ。若年にしてその詠歌を注目され、二十七歳にして結社(竹柏会)を主催。和歌革新運動の重要な一翼を担う。正岡子規門下の根岸派歌人や森鷗外・与謝野鉄幹・石川啄木・北原白秋らとも親交があった。彼の短歌指導は各門人の個性を尊重したものであり、木下利玄の他、同門には川田順・九条武子・柳原白蓮らがいる。

#### 10. (赤い鳥)

大正七(一九一八)年に鈴木三重吉が刊行した児童文学雑誌の名称。また、そこから出発・発展した児童文学運動は、通称(赤い鳥運動)として知られる。鈴木は、子供の純粹な心を育む上で、真に子供のための芸術的な童話・童謡等を創作しなければならぬと主張し、同時代の文学者たちに呼びかけた。昭和十一年の終刊までに多くの人々が賛同・協力。初期に関わった作家・詩人として、高浜虚子・有島生馬・芥川龍之介・北原白秋・島崎藤村・森鷗外らの名が挙げられる。

11. 細川護立(明治十六・一八八三〜昭和四十五・一九七〇) 肥後藩細川家第十六代当主)の学習院時代の雅号または別名が「むらさき」だと確定出来るだけの傍証はない。だが、彼は『輔仁会雑誌』において、少なくとも三回「行軍日誌」と「銃煙(烟)」の欄を木下利玄たちと担当しているので、消去法により、細川は(むらさき)と名のついていたと推定した。なお、他に(紫廬舎)の号も細川のものと思われる。また(晴川)は学校時代から後年に至るまで使

用していた。

12. 以下、武者小路と志賀が親友となる契機となった（邦語部例会）を明治三十八年十月五日と特定した理由を挙げる。

・武者小路と志賀が共に同じ邦語研究部の委員になったのは、唯一、この、最上級生としての新学期が始まった時（明治三十八年九月から一二年間）のみである。

・志賀は、菊池大麓院長に呼び出されて上田敏講師を断るよう言われたが、菊池が院長に在任していたのはこの年の十月十二日までであった。

・武者小路の記憶では、上田敏の件は「ある輔仁会の大会の時だった」（『或る男』八十九）となっているが、同年九月から十月の間に（大会）が行われた記録はない。

従って、二人が準備しようとしていたのは邦語部（例会）であると特定し、また、上田敏に断りの挨拶をしたのはこの年の九月中、下旬と推定した。

13. 内村鑑三は、明治三十六年から、対露開戦を支持した『万朝報』を退社し、積極的に非戦論を唱えていた。

14. この年は、九月に日露戦争が終結するまでは（非戦論）が喧しく、また講和条約締結直後には、条約内容を不服となえる集会がきっかけで（日比谷焼き討ち事件）のような騒動も起こっていたため、学習院側も言論には過敏にならざるを得なかったのだろう。

15. この「有島」は、小説家の有島武郎ではなく、その弟で後に画

家となる有島生馬（本名・壬生馬 いくま みぶま 明治十五・一八八二〜昭和四十九・一九七四）である。志賀と生馬は中等科では同学年であり、互いに一番の親友と認める親しさであったが、十八歳の時に、生馬は東京外国語学校伊太利語科に入学。その後も親交は続いたが、絵の道志した生馬は、明治三十八年五月、単身イタリア留学に赴いていた（二十二歳）。

16. 例えば、『輔仁会雑誌』第七十五号（明治四十一年六月）の伊吾（里見淳）作「争論」という文章の中には、「勿論人間は本務を尽す事の快感であることは疑を容れないし、又美の快感は真の善と一致する、（この事に就いて詳しい事は武者小路君の荒野の「人間の価値」と云ふのを読んで見たまえ）」というくだりが見られる。これが書かれたのは、同年四月に『荒野』が出た直後である。

17. 『白樺』初期の巻末雑記（「六号記事」）では、彼は（無車）と名のついている。ただしこれは、彼のあだ名「武者」に他の字を当てただけであり、「無軌道でがむしやら」という意味あいは出ているかも知れないが、雅号とまで言えるかどうかは確言できない。

※なお、引用文中の旧漢字は、すべて現行の漢字に変換して表記した。

（かめいしの／北海道教育大学釧路校非常勤講師）